

南山城の中世土器

—精華町椋ノ木遺跡を中心に—

森島康雄

1. はじめに

相楽郡精華町大字下狛小字椋ノ木他に所在する椋ノ木遺跡では、1995～1997年にかけて下水処理場建設に伴う発掘調査が実施された。調査の結果、溝で区画された屋敷地などが検出され、椋ノ木遺跡は中世前期の拠点的な集落遺跡であることが判明した。^(注1)

調査では良好な一括資料を含む多量の遺物が出土し、南山城地域における中世前期の土器様相の変遷をたどることが可能な資料が得られた。

本稿では、椋ノ木遺跡の資料を中心に、まず、南山城の中世前期の土器編年を試み、次いで、器種構成の変化について述べる。^(注2)

2. 編年

1 期(11世紀後半)

椋ノ木遺跡4-3トレンチS E 301、京田辺市興戸遺跡第5次調査S D 03を標式とする。^(注3)
椋ノ木遺跡5トレンチS E 118もこの時期である。

瓦器碗は、内面にほとんど隙間の無い密な圏線状ヘラミガキを、外面には密な分割ヘラミガキを施し、見込みには密なジグザグ状のヘラミガキを施すもので、大和型I-C型式に相当する。土師器大皿は、口縁部に2段のヨコナデを施すものと1段のヨコナデを施すものがあるが、いずれも口縁端部は外反している。土師器小皿は「て」字状口縁のもの、口縁端部が大きく外反するもの、口縁部が短く屈曲して立ち上がるコースター型のものの3種がある。また、3期にかけて、高い高台の付く土師器皿がみられる。

中国陶磁器には、白磁碗IV・V類、白磁皿II類がある。

2 期(11世紀末～12世紀前葉)

椋ノ木遺跡2トレンチS E 174下層を標式とする。

瓦器碗は、外面の分割ヘラミガキがやや粗く、体部上半にのみ施されるようになったもので、大和型I-D・II-A型式に相当する。内面には密な圏線ヘラミガキ、見込みには粗いジグザグ状暗文が施される。土師器大皿は、口縁部に1段のヨコナデ調整を施すもの

がみられるが、口縁端部は1期に比べて外反の度合いが弱く、丸く納めている。小皿は、1期に主体を占めていた「て」字状口縁のものと口縁端部が大きく外反するものがなくなり、口縁部が2段のヨコナデ調整によって屈曲するものが主体となる。高い高台の付く土師器皿にも大皿・小皿がみられる。白磁椀はV類がみられる。

3期(12世紀中葉)

椋ノ木遺跡3トレンチSD512、5トレンチSK118を標式とする。同遺跡3トレンチSK514・SK671は、当期の前半を主体とし、同遺跡3トレンチSD46は当期の後半を主体とする。同遺跡2トレンチSE174上層、3トレンチSK668、5トレンチSK158、7トレンチST185もこの時期あたる。

瓦器椀は、内面に密な圏線ヘラミガキ、外面上半に分割ヘラミガキが施され、見込みには連結輪状暗文が施されるⅡ-B型式に相当するものと、内面の圏線ヘラミガキに隙間が目立つようになり、外面のヘラミガキの分割性が失われ、見込みの連結輪状暗文が崩れたⅢ-A型式古相に相当するものがみられる。瓦器皿は、口縁端部が外反する器形で、内底面には十数往復のジグザグ状暗文が施される。土師器大皿は、口縁部に2段のヨコナデ調整を施し、端部が直立するものが主体を占める。土師器小皿は、口縁端部外面に面取りを施すものと、口縁部に1段のヨコナデ調整を施すものがほぼ同量みられる。

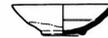
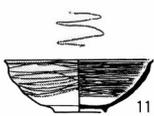
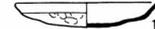
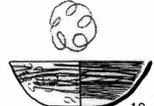
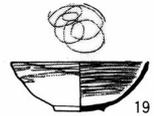
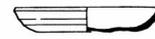
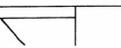
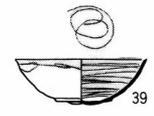
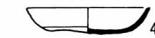
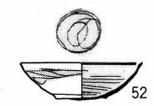
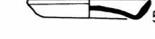
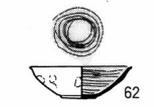
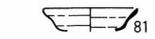
白磁は椀Ⅳ・Ⅴ類に加えて、見込みの釉薬を輪状に搔き取ったⅧ類がみられる。

羽釜は、内傾する口縁部をもつ土師質焼成の羽釜Aと直立する口縁部をもつ瓦質焼成の羽釜Dがある。羽釜Aには、鏝と体部の接合面が大きなものと、小さなものがあるが、前者から後者に変化するものと予想している。前者は体部の内外面ともにていねいなナデ調整が施されるが、後者は調整が粗く、指掌を使った押さえの痕跡が外面に多くみられる。胎土は粗く、茶褐色～茶灰色の色調を示す。羽釜Dは、口縁部外面にヨコナデによるわずかな凹凸が形成され、口縁端部はわずかに肥厚する。内面には板状工具による横方向のナデが施される。東播系須恵器鉢は口縁端部が内側に肥厚する。

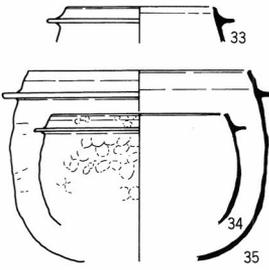
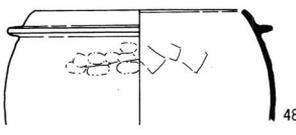
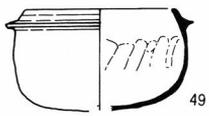
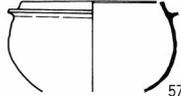
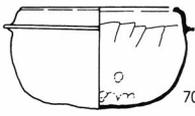
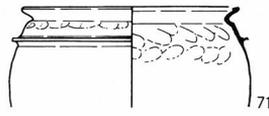
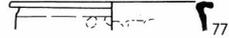
4期(12世紀後葉～13世紀前葉)

椋ノ木遺跡7トレンチSD05・SK04、5トレンチSK139を標式とする。同遺跡3トレンチSD513、4-3トレンチSK195、5トレンチSK143もこの時期を主体とする遺構である。

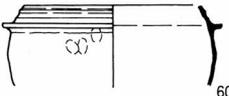
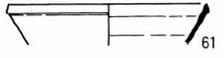
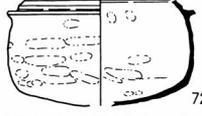
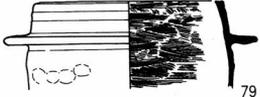
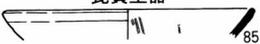
瓦器椀は、内面の圏線ヘラミガキの間隔が大きく開いてヘラミガキの施されていない部分の面積の方が大きくなり、外面のヘラミガキが口縁部のヨコナデの範囲にほぼ納まるⅢ-A型式新相に相当するものと、内面の圏線ヘラミガキの間隔が、圏線を容易に目で追うことができるほどに大きく開いたⅢ-B型式に相当するものがみられる。瓦器皿は、内底

	瓦器椀	瓦器皿	土師器大皿	土師器小皿	中国陶磁器
1 期			 	  	   
2 期			 	 	 
3 期	 	 	  	  	    
4 期	 	 	 	   	
5 期			 	 	
6 期			 	   	
7 期					
8 期			 		

第1図 南山城の中世土器編年図(1)

		羽 釜	
1 期			
2 期			
3 期	A		<p>1・4：棕ノ木遺跡4-3トレンチSE301 2・3・5~10：興戸遺跡第5次調査SD03 1~17：棕ノ木遺跡2トレンチSE174下層 18・20・22・23・25・28~30・36・37：棕ノ木遺跡3トレンチSD152 19・21・24・26・27：棕ノ木遺跡3トレンチSD46 31・32：棕ノ木遺跡3トレンチSK671 33：棕ノ木遺跡2トレンチSE174上層 34・35：棕ノ木遺跡5トレンチSK118 38・44・49：棕ノ木遺跡7トレンチSD05 39・40・45・47・48：棕ノ木遺跡7トレンチSK04 41~43：棕ノ木遺跡5トレンチSK139 46・50：棕ノ木遺跡3トレンチSD513 51：棕ノ木遺跡5トレンチSK143</p>
4 期		 	<p>52~56・59：棕ノ木遺跡4-3トレンチSD148 57・60・61：宮ノ口遺跡遺構78池 58：宮ノ口遺跡遺構70井戸 62~68・70~73：棕ノ木遺跡4-3トレンチSD50 69：棕ノ木遺跡1トレンチSK9504 74：棕ノ木遺跡4-3トレンチSK213 75~78：棕ノ木遺跡5トレンチSK61 79：棕ノ木遺跡4-3トレンチSK194 80：棕ノ木遺跡4-3トレンチSK153 81・83・84：棕ノ木遺跡3トレンチSD522 82：棕ノ木遺跡3トレンチSK177 85：棕ノ木遺跡3トレンチSD521</p>
5 期			<p style="text-align: center;">B</p>  <p style="text-align: center;">C</p> 
6 期			
7 期			 
8 期			

第2図 南山城の中世土器編年図(2)

	羽 釜	鉢	
1 期			
2 期			
3 期	<p>D</p>  <p>36</p>	<p>東播系須恵器</p>  <p>37</p>	
4 期	 <p>50</p>	 <p>51</p>	
5 期		<p>E</p>  <p>60</p>	 <p>61</p>
6 期		 <p>72</p>	 <p>73</p>
7 期	 <p>79</p>		
8 期	 <p>0 20cm</p>	 <p>84</p> <p>瓦質土器</p>  <p>85</p>	

第3図 南山城の中世土器編年図(3)

面に6～10往復のジグザグ状暗文が施されるもので、口径は8cm代に縮小する。土師器大皿は底部から緩やかに立ち上がる口縁部に1段のヨコナデ調整を施すもので、小皿は口縁部に1段のヨコナデ調整を施すものである。土師器皿の口径は大皿が13cm弱、小皿が8.0～8.5cm程度に縮小する。

中国陶磁器は前期までの白磁に替わって青磁が主体を占めるようになり、竜泉窯系・同安窯系の椀がみられる。

羽釜は、羽釜Aがみられるが、前期に比べて鑊がやや短くなるとともに、内面の板状工具によるナデの痕跡が目立つようになる。東播系須恵器鉢は体部上半が外側に開き、端部はつまみ上げるように上方に伸びる。

5期(13世紀中葉)

本期はあまり良好な資料に恵まれないが、棕ノ木遺跡4-3トレンチSD148が本期を中心とする遺構である。京田辺市宮ノ口遺跡第1次調査遺構78池、同遺跡第2次調査遺構70井戸もこの時期の遺構である。^(注4)

瓦器椀は、内面の圏線ヘラミガキがさらに粗くなり、口径が12cm代に縮小したⅢ-C型式に相当するものがある。見込みの暗文は内面の圏線ヘラミガキと重なっているものが多い。土師器小皿は、底部から緩やかに短く立ち上がった口縁部の外面が屈曲して、不明瞭な面をもつものが主体である。土師器大皿ではやや深みのある器形のもの、小皿では口縁部が中位で外側に屈曲し、口縁端部内面がわずかに凹むものが加わる。両者ともに、口縁部の立ち上がり部分に強い指押さえが加えられることが特徴である。このほか、小皿では口縁部が折れ曲がるように強く屈曲するものがみられる。

羽釜は、羽釜Aは鑊がさらに短くなり、外反する口縁部の端部を内側に折り返す土師質焼成の羽釜Bと内湾する口縁部の端部を外側に折り返す土師質焼成の羽釜C、内傾する口縁部の外面に段を持つ瓦質焼成の羽釜Eが新たに加わる。宮ノ口遺跡第1次調査遺構池78出土の羽釜Aは、瓦質焼成になっている。類例がなくはっきりしないが、羽釜Aがこの時期には瓦質焼成に転化している可能性がある。羽釜B・Cは大和産である。このほか、宮ノ口遺跡第2次調査遺構70井戸では瓦質三足羽釜が出土している。東播系須恵器鉢は口縁端部が上方ばかりでなく、下方へも肥厚するようになる。

6期(13世紀後葉)

棕ノ木遺跡4-3トレンチSD50を標式とする。同遺跡1トレンチSK9504、3トレンチSD535、京田辺市宮ノ口遺跡第1次調査遺構池172もこの時期の遺構である。

瓦器椀は、内面のヘラミガキが口縁部から見込みまで連続した渦巻き状になり、口径が11cm前後に縮小したⅢ-D型式に相当するものである。外面のヘラミガキは省略されてい

るものがほとんどである。土師器大皿は口縁部に1段のヨコナデ調整を施すものと、口縁部の立ち上がり部分に強い指押さえがみられ、口縁端部内面がわずかに凹むものがみられるが、後者が主体となる。後者の口縁部の断面形態は「S」字状に屈曲する。口径はいずれも12cm程度になる。小皿は口縁部外面が屈曲して面をもつもの、口縁部に1段のヨコナデ調整を施すもの、口縁部が折れ曲がるように強く屈曲するもの、口縁部が外側に屈曲し、口縁端部内面がわずかに凹むものがある。中国陶磁器では白磁皿Ⅸ類がみられる。

羽釜はB・C・Eがあるが、大和産の羽釜B・Cが主体を占め、前期まで主体を占めていた羽釜Aは姿を消す。東播系須恵器鉢は口縁端部の下方への肥厚が著しくなる。

7期(14世紀前葉)

椋ノ木遺跡5トレンチSK 61を標式とする。同遺跡4-3トレンチSK 213もこの時期の遺構である。

瓦器碗は、口径が10cm程度まで縮小し、高台がほとんど消滅したⅢ-E形式に相当する。土師器大皿は口縁部の断面形態が「S」字状を呈するものが主体である。

羽釜はB・Cに加えて、大和産で口縁部を内側に曲げて丸く納める羽釜Fがみられる。また、羽釜Dが7期から8期にかけての遺構である4-3トレンチSK 194から出土しているが、4期にみられたものに比べて鐙が短くなるとともに、器壁が厚くなっている。

8期(14世紀中葉)

椋ノ木遺跡4-3トレンチSK 153、3トレンチSK 177・SD 521・SD 522などが本期の遺構である。また、同遺跡4-3トレンチSK 194も本期を主体とする遺構である。

瓦器碗は高台が消失し、口径9cm程度に縮小したⅣ-B型式に相当するものである。土師器皿は前期に主体を占めるようになった口縁部が「S」字状を呈するものであるが、口径は9cm代に縮小する。

羽釜はB・C・Dがみられる。いずれも、鐙が矮小化し、口縁部が短くなる方向に変化しているが、羽釜Cには鐙の消失したものがみられる。東播系須恵器鉢は口縁端部の肥厚がさらに著しくなる。このほか、大和産の瓦質すり鉢が加わる。

3. 器種構成の変化

まず、器種ごとに産地別の構成の変化を簡単に概観したい。

瓦器碗・瓦器皿は各時期を通じて大和型で占められる。椋ノ木遺跡で出土する大和型瓦器碗・瓦器皿は奈良市街などで出土するものと区別がつかないが、興戸遺跡第5次調査SD 03出土の瓦器碗は、胎土がやや粗く焼成もやや悪いものがほとんどで、大和型の範疇に入るものではあるが、奈良市街などで出土するものとは生産地が別である可能性が高い。

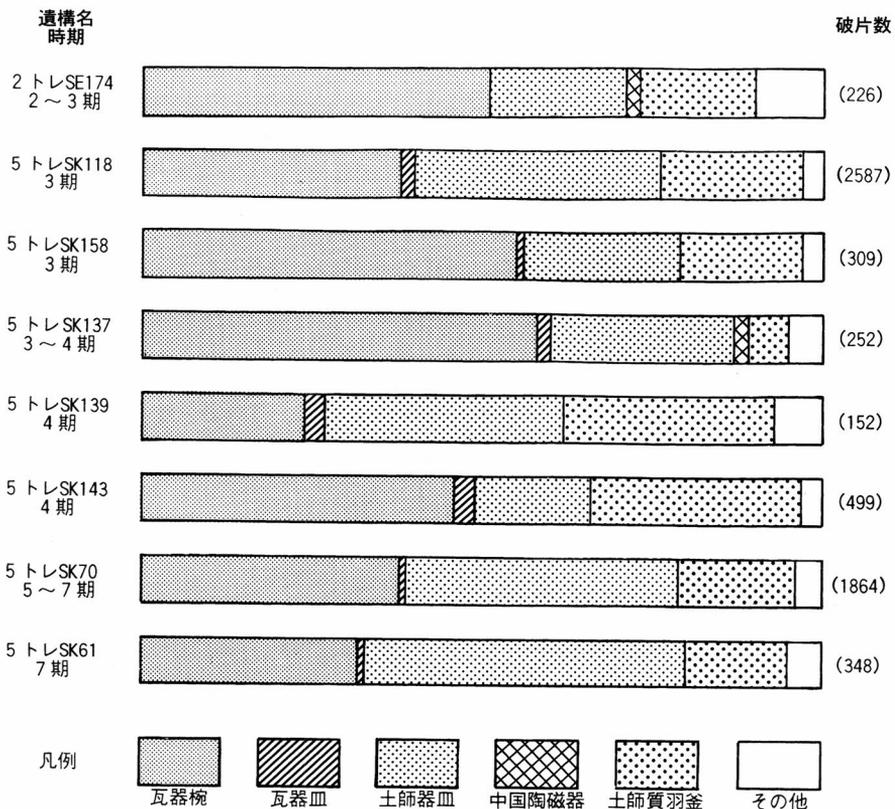
土師器皿も各時期を通じて京都よりは和のものによく似た形態を示し、瓦器椀の様相とともに、この地域が、山城国にありながら、山城よりも大和の影響を強く受けていることを示している。

一方、羽釜は、木津川を下った木津川・淀川流域の各地に分布し大和国にはみられない羽釜Aが、1期から5期まで主体を占める。大和産の羽釜B・Cは5期に出現すると、次の6期には羽釜Aを駆逐してしまうように主体を占める。ここで、羽釜の供給元が急激に転換することがわかる。

鉢は東播系須恵器が主体を占めるが、椋ノ木遺跡では、常滑産など他地域産のものがごく少量みられる。これは、椋ノ木遺跡が木津川に隣接し、おそらくは木津川の舟運と深くかかわりのある遺跡であることを示すものであり、この地域に普遍的な現象とは考えられない。8期になると大和産の瓦質すり鉢が出現する。

つぎに、時期ごとに器種構成がどのように変化するかをみる。

第4図は椋ノ木遺跡の主な遺構の出土遺物について、接合前の破片数を数えて器種ごと



第4図 椋ノ木遺跡遺構別器種構成図

の構成比を示したものである。これによると、各時期を通して瓦器碗と土師器皿で70%以上を占め、残りの大半を羽釜が占めていることが分かる。瓦器皿は数%に過ぎず、中国陶磁器は2トレンチSE174と5トレンチSK137で2%足らずを占めるのを除いてはいずれの遺構も1%に満たない。この地域における他の遺跡に同様の資料がないため比較することができないが、この構成比は、畿内の他の地域と比較しても特殊なものではないだろう。なお、羽釜のうち瓦質焼成のものは各時期を通して1%に満たず、その他に含めたが、これは、大和を除く畿内各地域において瓦質焼成の羽釜が増加する13世紀後半頃に、この地域では大和産の土師質羽釜(羽釜B・C)が増加して、煮炊具においても大和と同様の様相になることを反映したものである。

瓦器碗は3期を中心に4期までの遺物を含む5トレンチSK137までは出土遺物の半数以上を占めることが多いが、4期以降ではその構成比を減じている。これは、大和型瓦器碗の生産量が12世紀後半をピークに減少することを反映したものと理解できる。羽釜の構成比が6期以降に4期までと比べて小さくなることは、この間に主体を占める羽釜が、羽釜Aから羽釜B・Cへ変化することと関係があるのかもしれない。

4. まとめ

本稿では、南山城地域の中世前期の土器様相についてまとめたうえで器種構成の変化について述べ、この地域では、食膳具については中世前期を通して、煮炊具についても13世紀後半から大和の影響を強く受けていることなどを明らかにした。しかしながら、本稿でとりあげた遺跡は精華町と京田辺市に限られており、ここで明らかにした様相がどの範囲にまで当てはまるのかは明らかでない。管見では、城陽市ではこれと大きく異なる様相はみられないが、宇治市では大和よりも京都に近い様相を示す遺跡もある。また、近年調査が行われている久御山町佐山遺跡などでもこれと大きく異なる様相が明らかになりつつある。一方、旧巨椋池北岸にあたる京都市伏見区下三栖遺跡では、瓦器碗が楠葉型主体で、わずかに和泉型が加わるなど、様相が全く異なる^(注5)。南山城地域では中世の良好な資料が少ないため、この点については今後の課題とせざるを得ないが、現状では、京田辺市・城陽市以南の様相は本稿で示したものと大きくは異ならないと理解している。

(もりしま・やすお=当センター調査第2課調査第3係調査員)

注1 森島康雄・伊賀高弘1998「椋ノ木遺跡平成7・8年度発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第81冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)

森島康雄1998「椋ノ木遺跡平成9年度発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第85冊 (財)京

都府埋蔵文化財調査研究センター)

- 注2 本稿で使用する瓦器椀の型式名と年代観は、森島康雄1992「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」(『大和の中世土器』Ⅱ 大和古中近研究会)、尾上 実・森島康雄・近江俊秀1995「瓦器椀」(『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社)による。
- 注3 鷹野一太郎1989『興戸遺跡発掘調査概報-郡塚地区の調査-』(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第10集 田辺町教育委員会)。興戸遺跡の資料は鷹野一太郎氏のお世話で実見した。
- 注4 南 博史ほか1993『宮ノ口遺跡』(『京都文化博物館調査研究報告』第10集 京都文化博物館)、南 博史ほか1996『宮ノ口遺跡-第2次発掘調査-』(『京都文化博物館調査研究報告』第12集 京都文化博物館)。宮ノ口遺跡の資料は南博史氏、鷹野一太郎氏のお世話で実見した。
- 注5 桜井みどり1998「下三栖遺跡」(『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都府埋蔵文化財研究所)、百瀬正恒1998「下三栖遺跡」(『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都府埋蔵文化財研究所)。下三栖遺跡の資料は百瀬正恒氏のお世話で実見した。